

「会社からは、何よりも安全第一を最優先として被災地に送り出された。また、社員の中には、出発する前に、家族全員から『無事に帰ってきてね』と声をかけられた者もいた。震災への対応を通じて、我々の家族の絆、社員同士の絆も強くなっている」と話すのは、宮川興業(株) (広島市安佐南区) の小谷彰伸執行役員建設・交通事業部長。

東日本大震災 復旧向け支援活動に協力

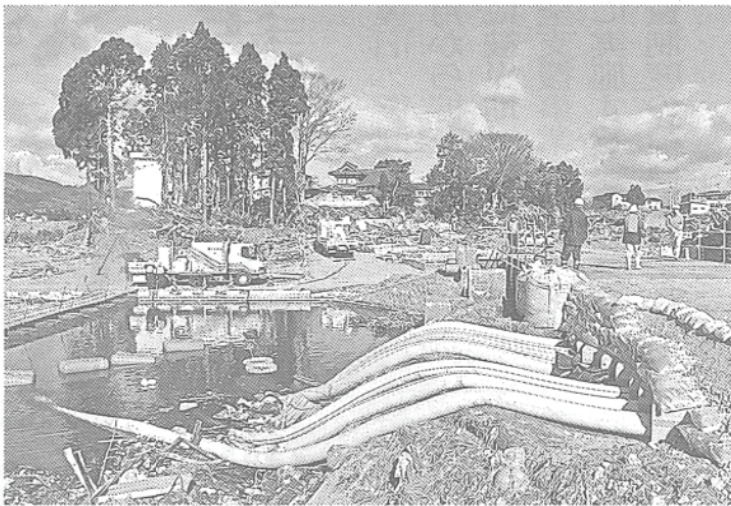
宮川興業(株) 執行役員 建設・交通事業部長 小谷彰伸氏に聞く



同社では、運転手を含めて4人で1グループを編成。グループは約24時間かかる移動時間以外に、現地で実質7日間にわたって排水作業に励む。そして、現地で次のグループに引き継ぎを行う。小谷部長のグループは、同社の第8班として5月2日に広島を出発し、今月11日に帰還した。

最初に現地入りした第1班の社員からは『まだ地面が乾ききらないうちに、被災された地元の方が自分の家に戻り、行方不明になった家族や遺留品を探されていた。その光景を見て、非常に胸が

ポンプ車で被災地の排水作業 約2カ月従事



排水作業のもよう

張り裂けそうになった」と悲しい報告を受けた。小谷部長自身も「震災の情報に関しては日々、テレビや新聞等で認識していたつもりだった」と語り、国各地から、建設業者とるものの、今回、携わった陸前高田市における支援業務で現地を眺め、「想像以上に壊滅状態と」なっているまに全体をの当たりにし、大変シヨ

「当初は、支援活動を進める上での後方支援も」と指摘する。それでも全

「建設業者が担っている役割の大きさと、仕事に対する誇り」を

「建設業者が担っている役割の大きさと、仕事に対する誇り」を実感したという。復興への青写真はなかなか描けないが、こうした地道な活動によって復旧への道筋が徐々に見えつつある。